

歴史は毎日つくられる

羽成 唯

「今度は塙高の男子と浮名か？お盛んだな、立花」

いつものお小言。

「高校に入ってから何人目だ？」

良く覚えていないけど、ここに来るのは5、6回目？10回は来てない。

「たいがいにしないと、実刑に処されるぞ、お前。」

実刑、というのは停学とか退学？

「校長もこれ以上は我慢できんと言っている。」

校長先生もお怒りなのだ。

生徒指導室を後にすると、校門まで歩く。

昨日の出来事を先生がご存じということは、誰かが学校に連絡したのだ。世間の人には親切だけれど、それが裏目に出ることもある。

「万結」

聞き覚えのある声に振り向くと、フェンスの影からその顔。

「塙くん。」

本当の名前は聞いたけど、よく覚えていない。

彼はびよんびよんと跳ねるように前に来た。

「き、昨日は、その、ありがとう。」

お礼。何のお礼だろうと考えると、練習に付き合ったことかな？

「どういたしまして。それで、本番っていつなんですか？」

「えっ！」

顔を赤らめ、両手を前にモジモジし始めた。

なかなかのイケメンなので、もう少しシャキッとした方がモテるのに。

「いきなりそんな」

いきなりもなにも、本番があるから練習したのでしょうかと思う。

昨日、彼は大通りの歩道橋上で

「俺は、立花万結が、好きだー。」

大声で叫んだ。

そして、空を見上げとても満足した様子。

私は『いい感じですね！』と褒めて、でもアルバイトがあったのですぐその場を去った。

あれは、毎年市内で開かれる『大声コンテスト』の練習だろう。今年はいつなのか、通行人も拍手喝采だったし、よく通る声で本当に羨ましい。

「でも、本番はあれじゃないほうがいいと思います。」

「な、何？」

塙くんは戸惑う。

「お母さんいつも美味しいご飯ありがとう！とかの方が、イメージ良いと思うな。」

「はっ？」

「がんばってくださいね。」

ぽんっと肩を叩くと、彼は怯んでしまった。

触られて嫌だったのかな。悪いことをしてしまったと思ったが、上げた手の時計が目に入り

「あっ、ごめんなさい、習い事の時間が。」

彼は、左手を前に何か言いたそうだったが、手を振り

「さようなら。」

ピアノのレッスンに向かった。

「そうじゃなくて」

先生は私の両手を取ると、指を一本一本撫でるように

「動きが、滑らかじゃないんだ、もっと、こう」

触れられてざわざわするのだが、これは指導。

私の指には滑らかさが足りないのだ。

つい先日、長年教わっていた美月先生が引っ越しで辞めてしまい、泣く泣くお別れしたばかり。後任の先生には失礼だが、テンションが下がってしまって、今は惰性でレッスンに通っている。そのせいか、最近あまり上手いかず、レッスン後は落ち込んでしまう。毎回だと本当に嫌になってしまいそうだったので、お気に入りの雑貨屋さんに寄って気分を上げようと思った。

駅とは反対に商店街を歩く。

通りは、食材や日用品が入ったビニールを手に持ち帰宅を急ぐ人、下校する制服姿で賑わっていた。お店は繁華街のはずれで少し遠いけれど、私の好みにぴったりと合う商品がたくさん置いてあってワクワクするのだ。

ピアノへの気持ちもそのうち戻ってくると良いなと思っているし、好きなのは変わらない。

途中、飲み屋から出て来た中年の男性が、ふらりふらりと体を揺らし、電信柱にぶつかりそうになりながら歩いていたので、大丈夫かなと横を過ぎる。

ふと目が合った。

「綺麗なねーちゃんだな。」

見ず知らずなのに褒めてくれる。

「ありがとうございます。」

私はとっつき難い顔をしているらしく、初対面の人にはある程度距離を置かれるので、それはめずらしく、この人は人見知りしないのだ。

「ヒマ？」

「いえ、あの、暇ではないんですけど。」

一応予定はある。

「少し遊んで行かない？」

「いえ。」

「ちょっとくらい、いーだろ。」

「あっ、いえ。」

おじさんは私の後ろを眺めると

「ちょっとそこで、おじさんと話していかない？」

見るとその手のホテルがそびえ立つ。

「ここは、普通のホテルじゃないですよ、喫茶室とかありませんから。」

「なーに言ってんだよ、ピロートークだよ、カマトトか。」

がははと大笑いするのだが、その面白さがよく分からない。カマトトってなんだろう、私、もしかして流行語遅れ？

「なっ、いいだろう、ちょっと」

腕を掴まれ引き込まれる。

「いえ、あの」

ここはちゃんと

「予定があるので。」

「いやいや、ちょっとだけだから」

「あの、急いでいますので。」

「大丈夫、おっちゃん早いから。」

またがははと大笑い。

「いえ、あの」

どうしよう。

「あっ、明日もお仕事じゃないですか？お忙しいですよ。私も学校なので」

すると、みるみる顔を曇らせ

「昨日クビになったばかりだよ。」

それは、悪いことをやってしまった。

「ご、ごめんなさい、私」

ちゃんと目を見て謝ろうと顔を近づけると、いきなり抱きつかれ、お酒臭い息が頬に近づき、むにゅっと触れる。

「きゃー」

「ねえちゃん。可愛いな、可愛いな」

酔っぱらいは嫌！

「俺を慰めてくれよう。」

「嫌です、だって私もこの前先生が辞めたばかりで、ショックを受けているんですから。」

不幸なのは、私も同じだから。

「じゃあ、慰め合おう。」

足の間に入ってくる。

迫るおじさんを、ぐいぐい両手で必死に押しのけようとしたが、吸いついた蛸のように離れない。

怖いよ、と涙がこみ上げてくると

「いいかげんにしろ、おっさん。」

あきれたような声と同時に体が少し離れ、冷たい滴が空から。

おじさんの頭上にはペットボトルが飛んでいて、水がドボツと吐き出される。

「つ、冷てえ。」

おじさんが振り返る先には、高校生？私とそれ程変わらない男子。

「お店の前で騒がれると迷惑なんです。」

「何すんだ、おめ」

「営業妨害なので、警察に通報しますよ。」

「なんだと？」

「この店の者です。」

後ろを親指で示す。

この、ホテルの人？

辺りを見ると、みな遠巻きにこちらを注視しているので、入りたい人がいても入れない、確かにお店の前で騒いだら迷惑。

「ごめんなさい。」

私が謝ると、その人は驚きと不思議を浮かべ、でもすぐ微笑んだ。

それほど怒っていないようなので、ちょっと気が楽になった。

おじさんも少し冷静になったのか、

「わ、悪かった。」

そして思いついたように

「じゃあ、金払うから」

「彼女は嫌がっていますよ、このままだと暴行罪。話はちゃんとつけてください。」

彼の言葉におじさんは

「お、おう。」

と腕組み、妙な自信を浮かべて私にすり寄る。

「ねえちゃん」

いやです。

「でも、彼女制服なので淫行になります。」

ぐっと息を飲む。

「目撃者が多すぎて、庇えません。」

おじさんは辺りを見回し、急にそわそわしだした。

「痴漢行為も問題だし」

彼は私に判断を求めるような表情。

このおじさんは酔っているのだ。

昨日会社を首になり、だいぶこの世を儚んでいるようだし、大切なものを失う気持ちは分かる。もちろん、気持ちは悪かったけれど、警察を呼べば学校に連絡が行くので、あまり気が進まない。

それでもすぐには決められず、うーんと首を傾げていると、

「彼女が見逃してくれれば」

「オレは、だけど」

「謝れば、見逃してくれるかもしれませんね。」

謝れば、を強調する。

そして皆で沈黙、三角形に対峙、私は彼、彼はおじさん、おじさんはきよろきよろと微妙な時間。

やがておじさんは

「いや、その、悪かった。」

手を頭に当て、何かむにやむにや言いながら下げる。

「はい。」

返礼するとほっとしたように、

「じゃ、じゃあ、行ってもいいかな？」

彼が再び私を見るので

「はい。」

おじさんは右手を軽く上げ詫びるような仕草、そして観衆の隙間を縫うようにそそくさと消えて行った。

皆の視線がこちらに戻ったので少し怯んだけれど、その前にすべきことが。

「あの」

彼を見ると、ペットボトルの残りを飲んでいて、声に目を向ける。

「ありがとうございます。それに、お仕事の邪魔をして申し訳ありませんでした。」

頭を下げると、やはり先程と同じような笑顔。

きりりとした目鼻立ちが素敵、なにより自分を助けてくれたので、この人はヒーロー。

「水がかかってしまった、ごめん。」

ボトルとは反対の手に持つ、白いタオルを差し出してくれた。

「いえ」

しかし、どうやら袖とスカート辺りに水滴がついていたようで、彼がタオルを開き、手に乗せてくれたので、受け取るとスカートを手繰り、拭いた。

「大丈夫？」

「はい、大丈夫です。」

だいぶ気持ちは落ち着いた。

「じゃあ、悪いけど仕事に戻るので。」

彼が行ってしまいそうになり

「あの、タオル」

「あげる、どうせ定期的に交換するものだし、必要経費。」

「でも」

「早く立ち去った方がいいと思う。」

辺りをみると、通行人は掃けたが、商店の人はまだこちらを見ている。

「もし、怖いなら家まで送って行こうか？」

彼はお仕事でだし、そんなこと全然考えていなかった。親切な言葉に恐縮し、

「いいえ、大丈夫です。本当にありがとうございました。」

再び頭を下げると

「気をつけて。」

と中に戻っていった。

「立花、日参か。」

いつものお小言。

「ご両親は諦めている様子だが、学校としてはそうもいかない。」

頭を垂れていると

「次やったら、実刑だぞ。」

生活指導室を後にする。

私が悪いのだろうか。

反省をしないわけではないが、理由が良くわからず、いつも同じ感想しか浮かばない。

けれど、これだけ問題が起こるのだから、私が悪いのか。

高校生になり生活エリアが広がると、見ず知らずの人まで参加してくるようになったので、より複雑になり、一体どうすればよいのかと考えながら門を出ると

「万結。」

聞き覚えのある声に振り向くと、フェンスの影からその顔。

「塙くん。」

彼はぴょんぴょんと跳ねるように前に来た。

「その呼び方冗談なの？結構面白いんだね。」

いえ、冗談ではなく。

「本当は、下の名前で呼んで欲しいんだけどなあ。」

下くんと呼ぼうかしら、冗談ではなく、半ば本気。

並んで駅まで歩く。

結局、昨日の出来事は警察に通報されていたようで、帰り道でお巡りさんに呼び止められ連絡先を聞かれ、それが自宅と学校に伝えられたようだ。両親と担任の先生は私の身の潔白を信じてくれているけれど、生活指導や校長先生には風紀を乱す良からぬ輩と思われるようで辛い。

「なあ。」

彼の声に目を上げると、彼の真剣な表情。

「俺、さあ」

しかし、言葉を止め、ためらいをみせた。

どうやら悩み事のような。

困った。

今は自分のことで一杯なので、彼の悩みを一緒に考えてあげることなどできない気がする。

それに

「あの、ごめんね。私ちょっと行くところがあつて。」

彼が怯んだので、悪いなと思ったけれど

「本当にごめんなさい。」
90度頭を下げて許してもらおう。

昨日のホテルの前に立つ。

タオルを返そうと訪ねたが、入口はここだよ。

返さなくて良いと言われたが、そうもいかない。

表門をくぐり、自動ドアを抜けると、正面には部屋番号の書いたパネル。

普通はフロントがありそうなものだが、初めてなのでよく分からず、辺りを見回すと、小窓がある。

「すみません。」

声を掛けると、

「正面のパネルで部屋番号のボタンを押してください。」

多分昨日の彼の声。

良かった。

「あの、昨日タオルをお借りした者ですが。」

しかし返事はなく、気配も消えてしまったので、どうしようかと悩んでいると、横の扉が開き、彼が顔を出した。

良かった。

「昨日は、ありがとうございました。」

扉の彼の傍に

「いや、わざわざ。」

「これ」

差し出したタオルを受け取ると

「本当に良かったのに。」

笑ってくれた。

「無くなったら怒られてしまうかと思って。」

「大丈夫だよ、黙って持っていくお客もいるから、1枚や2枚。雑巾ぐらいにはなるだろう。」

必要経費？

「あの、それから」

もう一つ差し出すと、それにはすぐ手を出さず、表情で尋ねるので

「昨日のお礼に、つまらないものですが。」

「いや、本当に気にしないで。」

「あの、でも」

ここで引っ込めるわけにはいかない。

「もし、良かったら。お好きだといいたいです。」

ずいっと差し出すと、彼は遠慮がちに手を伸ばす。

「じゃあ、お言葉に甘えて。」

受け取ってくれたので、良かった。

その時、自動ドアの向こうで人の気配、彼は目を向けると、すぐ私に抑えている扉を指し、中に入るよう促したので、慌てて体を滑り込ませる。

扉が閉まったのと同時に自動ドアが開いた。

部屋は明るく事務所然として、備品が置かれた棚や掃除道具、オーディオ機材のようなもの、点いていないテレビ、事務机や応接テーブル、フロントの横には映像を映すモニターが、今まさに二人連れを映している。

彼がソファを勧めてくれたので、一礼して腰を掛けると、テーブルの上には数学らしきページとノート、参考書が置かれていた。

彼がお茶を入れる気配がする。

「あの、どうぞおかまいたく。」

「うん。」

フロントに居なくても大丈夫なのだろうか、外の二人は結構悩んでいるようで、ひそひそ声、いやでもだっつての後沈黙、ボタンを押すと紙の落ちる音がして、コツコツと響く足音が遠のき、やがて気配が消えた。

それと代わり彼が茶碗を持って現れる。

私の前には来客用、彼の前にはたぶん彼用の湯飲みを置き、お煎餅を横に。

「ありがとうございます。」

「おもたせ、っていうんだっけ、開けてもいいかな？」

私が持ってきた袋をかざすので

「もちろんです。」

学校の最寄り駅で一番人気の洋菓子屋さんの焼き菓子の詰め合わせ。

「うまそう。」

彼の表情は彼の言葉通り。

「お好きですか？」

「うん、それに腹が減っていて。」

それは良かった。

「これがマドレーヌで、こちらがフィナンシェ」

お店に書いてあった通りの説明すると

「どれにする？」

と私に。

両手をやわやわ振りながら

「いえ、私は大丈夫です。」

「一緒に食べようよ。」

また箱を眺め、考えてから目を上げた。

しばらく二人で遠慮の時間、でもそれほど重たくはなく、ただ相手を待っている。

彼がもう一度どれにする？と表情にしたので、迷ったがすでに彼の所有物だと思うので、勧められるとおり一番好きなブラウニーを

「じゃあ、これでもいいですか？」

と指さすと、彼が取って渡してくれ、彼は一番大きなマーブルケーキを手取る。

「コーヒーの方が良かったかな。」

「日本茶で食べるのも美味しいですよ。」

彼は個包装を開けると、まるでお握りを食べるように、すぐ胃袋に消えた。

「これが、一番人気みたいですよ。」

マドレーヌを勧めると、じゃあとそれは丸呑みした。

その潔さは気持ちよく、持ってきてよかったと思える。

お茶のお替りを入れてくれる間、再び辺りを見回すと、奥の壁に制服が掛かっていることに気がついた。

それは、

「塙高校ですか？」

「そう。」

塙くんの顔を思い出し、塙くんが二人になってしまったような気分。

塙Aくん、塙Bくんと考えたが、それは恩人に失礼だ。

「私、立花と言います。名前を覚えていただいて宜しいですか？実は、塙高校には知り合いがいて、今まで彼を塙くんと呼んでいたのですが、それだと」

「彼氏？」

目の前にお茶が置かれた。

「ありがとうございます。いえ、彼氏ではないです。発声練習につき合ったりして、この前も学校の近くの歩道橋でそれを」

彼がお茶を吹き出しむせる。

「大丈夫ですか？」

咳き込みながらも大丈夫というので、背中をさすってあげなくても良いかしら？

やっと呼吸を整えると

「遠田の彼女？」

ああ、そういえば遠田くんと言っていたような。

「彼女、ではないです。」

さっきそう言ったつもり。

「いや、でも歩道橋で」

「見ていたんですか？」

喝采の中の一人、もしかして応援？

「いや、見てないけれど、学校中の噂だから。」

「噂？」

ああ、大声コンテストの参加。

「彼、よい声ですね。大会でもきっと上位に食い込めそう。」

「大会って？」

彼がとても興味深げに聞くので、もしかして墙、いや遠田くんは秘密にしていたのかしら。ちょっと冷や汗がでたが、言葉は戻らない。

「ええ、っと、毎年やっている大声コンテスト」

さらに嘖き出す。

何か面白いこと言いましたっけ？

彼がなかなか笑い止まないのので、どうしようと思ってしまう。

「いや、ごめん。君の事を笑っているわけじゃ、いや、君の事かな？」

肩を震わす。

「だって、歩道橋で、君の事が好きだと叫んだんだろう？」

「はい。」

「なんで？」

まだ笑っている。

なんでって

「隣にいたからじゃないですか。だから、彼には言っておきました。」

「何を？」

「本番では、お母さんを題材にした方がイメージが良いですよって。」

さらに笑う。

どうしてだろう、最近お笑いの神様に見放されている気分。

「腹いて」

テーブルに頭をつけて笑っているので、息をするたびそれが当たり、少し痛そう。さすってあげた方が良いのかと思う。やがて、やっと落ち着き体を起こすと、とても明るい笑顔を見せたので、さておき、楽しい気分になった。

「遠田が大会で「お母さん大好きだー」と叫んでいるのを想像してしまった。」

またちょっと笑う。

「でも、それは笑いごとではなく、ちょっと危険な香りが」

「君が提案したんだろう。」

「私は、お母さんに感謝を」

「ああ、なるほどね。」

彼は立ち上がると奥に、冷蔵庫から布巾とペットボトルを2本持ち、

「飛んでない？がんばって横を向いたつもりだけれど」

私を見るので、私も確かめてから

「大丈夫です。」

あやうく返したタオルをまた貸してもらうことに。

布巾でテーブル周りを拭いてから、1本を私の前に。

「ありがとうございます。」

彼はボトルのお茶をごくぐくと音を立て、は一つと、息をつく。

「遠田はモテるんだけど。」

「同じクラスですか？」

「いや、隣。」

「学校でモテモテなんですね。」

「男子校だから、それは。ただ、近所の女子と遊びまくって」

言葉を止め、しまったという表情。

「女子が、食いついてくるらしいよ。」

「彼、もう少しシャキッとすれば、もっとモテると思いますけど。」

「えっ？」

と驚く。

「なんか、はっきりしないというか。」

「遠田が？」

「はい。いつもフェンスの影からひょいと現れて、隣で他愛もない話をして、別れの挨拶をするのも、いつも私です。」

「遠田が？」

「はい。ちょっと、影が薄くないですか？」

「遠田が？」

何度も言うから、彼の名前は絶対忘れないような気がしてきた。ついでに下の名前も言ってくれるといいのにな。

あ、そういえば

「あの、お名前。」

「ああ、ごめん。南野といいます、宜しく。」

改めてお互いに頭を下げる。

「南野さんは、こちらでアルバイトを？」

辺りを見回す。

「うーん、まあ。」

「時給って、いいんですか？」

「うん、まあ。」

「私も週3回ほど、家の隣のクリーニング店でアルバイトをしています。」

「忙しい？」

「季節の変わり目はそうですね。こちらは？」

「うん、まあ。」

「いろいろなお客さんいますよね。」

「そうだな。」

「さっき入ってきた二人」

彼は何だったっけ、という顔

「なんだかすごくひそひそして」

彼は目を上にして考えて、

「まあね。」

「まるで悪いことをしているみたい。」

彼は再び目を上にして

「まあね。」

「楽しむために来たんですよ？ どうしてあんなにテンションが低いのかなあと思っちゃいます。」

彼は再び吹き出す。

あれ、私また何か言いました？

「いや、そうだよな。」

今までで一番納得した顔で頷いてくれた。

その時、電話が鳴ったので彼は立ち上がり、受話器を取ると2、3事交わした。

彼はアルバイト中なのだと改めて意識した。

「すっかりお邪魔してしまって」

「帰るの？」

と聞かれると、少し名残惜しさが芽生えたが、腰を上げる。

「はい、お邪魔しました。」

頭を下げる。

「裏口、そっちだから。」

反対側の扉を指す。

「出て右に折れると、商店街の裏手に出る。分かる？」

考えて、多分大丈夫だろうと思ったので頷く。

「気を、つけて」

彼は言葉を選ぶように、そして

「遠田呼ぶ？送ってもらった方がいいかな？」

とからかうような顔。

戸惑うと

「発声練習の付添は嫌か。」

そう、本心はできれば一人でやってくれればいいのにと思っていた。

「はい。」

南野さんが笑うので、言われたことに答えたのにと思ったが、笑顔が素敵だったので結果は良い。

最後に再びお礼を言うと、彼はきりりとした笑顔を浮かべた。

しかし、フロントに来たお客様の対応を始めたので、そっと裏口から出た。

「万結。」

聞き覚えのある声に振り向くと、フェンスの影からその顔。

「遠田くん。」

彼は一瞬怯み、しかし嬉しそうに走り寄る。

「名前」

「昨日南野さんに会いました。」

「なんの？」

少し考える。

「隣のクラスの」

「ああ、南野。えっ、なんで？」

急に不機嫌な顔。

「助けていただいたんです、この前。」

「助けて？えっ、何があったの！」

「まあ、ちょっと。」

話すと長くなりそうだったので言葉を濁す。

するとさらに不機嫌な顔。

駅に向い並んで歩く。

そういえば遠田くんは私を名前と呼ぶけど、いつからそうなったんだろう。そもそも、知り合ったきっかけはなんだっ
たかと記憶を辿っていると

「俺、手紙を貰ったんだ。」

「手紙？」

「この前、手渡された。」

ラブレターのこと？

そういえば

「南野さんが遠田くんはモテるって言っていましたよ。」

「えっ、そう。」

ちょっと嬉しそう。

きっと手紙をもらった時も嬉しかったんだろうな。

「読みました？」

「いや、まだ、開けてない。」

まあ、人前で開けるなんて失礼だものね。

何度かもらったことはあるが、自分が書くとしたどんな気持ちだろう。いろいろな感情が湧くが、一番は気恥ずかしさ。
手紙を書くのは、直接に伝えられないほどの距離なのか、近いなら言ってしまった方が良い気がすると思った時、南野
さんの顔を思いだし、いや、でもやっぱり直接は難しいかも、とはにかんでしまった。

あれっ、南野さん？

「もし万結が」

隣の声に目を上げると、遠田くんの真面目な顔。

「はい？」

「もし万結が嫌なら、この手紙は開けない。」

私が、どうして？

「開けずに返すよ。」

私がどうして嫌うと思うのか。

人の恋路を邪魔する心の狭い人間だと思われているのかと気持ちがざわつく。そもそも、どうしてこの人はそんなことも
一人で決められないのかと思ってしまう。

「相手に失礼じゃないですか。」

つい強い口調で言うと、彼が立ち止まる。

振り返ると、茫然と佇んでいて、そして何か反省したように

「すまない、俺は」

と呟いている。

申し訳ないけれど、これ以上話を続ける気にはなれず

「アルバイトがあるので先に帰ります、ごめんなさい。」

彼を置いて駅に向かう。

少し言い過ぎたかな、嫌われたかもしれないけど、本音だししょうがない。

「万結。」

聞き覚えのある声に振り向くと、フェンスの影からその顔。

「こんにちは。」

今日の遠田くん。

天気予報の気分で遠田くんの表情を見ると、今日は曇り。

またまた並んで駅まで歩く。

しかし、沈黙。

手紙の件でも切り出せばよいのか、しかし気が進まず、そもそも今日は予定もなく、かすみちゃんも部活がなかったので一緒に帰らなかったのに、悪いからという謎の理由で断られ、気持ちが沈んでいる。

あまり良くない一日。

ふう、とため息をつく。

それを合図のように遠田くんが話しはじめる。

「酔っぱらいに絡まれたんだって？」

酔っぱらい？

「南野に聞いた。」

南野さんの名を聞いたら、笑顔を思い出し、少し気分が戻った。

「ええ、はい、助けていただいて。南野さんと話したんですか？」

「そういう時は俺を呼べよ。」

意味が分からない。

「携帯番号教えてさろう。」

聞きましたが

「でも、間に合わないじゃないですか？」

「間に合わなくても行くよ！」

やっぱり、意味が分からない。

「わざわざ、そんな。申し訳ないですから。」

「申し訳ないって何？」

ありがとう、って言うべきかな？

反省し、改めようとした時

「どうして万結はそうなんだ。」

と声を荒げる。

雷雨に急転。

何をどう言い返してよいか、分からなくなってしまったので俯くと、彼は慌てたように

「あっ、いや、ごめん。怒ったわけじゃないんだ。」

そして黙る。

どうして彼はこんなに移ろうのだろうか。

失礼だが、少し煩わしく思う。

遠田くんと別れ電車に乗り、手すりに寄りかかると揺れに身を任せていた。

このまま家に帰っても、買物をして、ずっと気持ちを引きずりそうで嫌だ。

そして、南野さんに聞いたという遠田くんの言葉を思い出し、彼の笑顔を思い出したら、見たいなと思った。そして、一度思ってしまったらその考えは消えず、足が向かってしまった。

門をくぐり自動ドアを抜けるとフロントの小窓に向かう。

遠慮がちに声を掛けると、すぐ扉が開いて、南野さんが招いてくれた。

とたん気持ちが軽くなり、足早に部屋に入る。

「お邪魔、します。」

彼は抑えていた扉を離し、ソファを手差してから奥へ、冷蔵庫を開く音。

「お構いなく。」

「うん。」

でもペットボトルのお茶を出してくれた。

テーブルの上には現国とノートと参考書。

「勉強ですか。」

「宿題。」

机上を整理しようとするので

「そのまま、あの、すぐお暇しますから。」

「裏口から来ればいいのに。」

その言葉は、私の訪問が拒まれていないような、根拠のない喜びを生んだ。

教科書とノートを閉じる。

「商店街からの入口は目立つから。」

入口はそこしかない気がしていたが、そういえば裏口も入口。

「堂々とするのはポリシー？」

と聞かれ、そんな主張をしたらどうかと記憶を辿っていると

「遠田が」

遠田くん？

ちょっと表情が堅くなってしまった。

「昨日呼び止められて、詰問された。」

「詰問ですか？話をしたとは言っていましたけれど」

「助けたとはどういうことだーと」

彼は私にも勧め、お煎餅にかぶりつき、ぱりぱりと噛み砕き、ペットボトルのお茶で流し込む。私はその食べっぷりを眺めてから手持ちのお菓子を差し出すと、

「いつもありがとう、でもそんなに気を使わなくて良い。」

と留める。

「私も、その、食べる気で」

それじゃ、と一つ取った。私も一つ取ると、残りはお煎餅の籠に並べてしまう。彼は私の手を眺めながら、

「ま、それで、これこれこういうことがございました、と説明申し上げたら」

「そんなに丁寧にする必要ありますか？」

南野さんはちょっと考え

「状況はだいぶ割愛した。」

補足。

「今度から、そういう場合は俺に連絡を寄越せとご立腹で」

「遠田くんが。」

「遠田くんが。」

もう名前は覚ええましたよ。

しかし、やはり意味が分からない。

「そんな機会が2度も3度もあるかって言い返したんだけど」

お菓子を口に放り込む。

「ですよ。」

私はマドレーヌを一口。

「あっ、いや、あるかもしれないなと思って、念のため連絡先を交換しておいた。」

「はい？」

「それから独演会が始まったんだ。最初、まゆゆの話でもしてんのかと思ったけど」

「まゆゆが、好きなんですか？」

「君の名前だろう？」

「あっ、立花万結といいます。」

「南野巧です。」

再び自己紹介でお辞儀し合う。

「まあ、立花さんの話だと分かって、君がいかに綺麗で心が広く真っ直ぐな人間なのかと。」

「私が？」

「綺麗なのは見りゃわかるよ、と心の中で突っ込みつつ」

お礼を言った方が良いかしら。

「遠田が、他の女の子の話をして焼餅を焼かず、自分が間違っただけをしたら詫めてくれたと喜んでた。」

「詫める？」

なんのことだろう。

「手紙を貰ったんだって？」

「ええ、あの、はい。そのようですね。」

「それを立花さんに相談したら、雷を落とされたと。」

「雷？」

「相手に失礼、です？」

「そうは、言いましたけど。」

私の不服そうな物言いに、南野さんは不思議そう。

「なにか、違うの？」

「言葉は合っています。相手に失礼ですよ？」

「うーん、まあ、失礼かもね。」

「でも、詫められて喜んで、どういうことですか？」

南野さんは黙ると、天井を見上げた。

その時電話が鳴った。

彼が向かったので、時間を見ると6時30分、そんなに居たつもりはないのに。

話が途中だしちょっと名残惜しい、でも仕事だからと重い腰を上げる。

「帰るの？」

「はい、お邪魔しました。」

頭を下げる。

「気をつけて」

「はい。」

「遠田呼ぶ？」

またからかうので、ちょっと悲しくなってしまったが

「大丈夫です。」

裏口を開ける。

出がけに頭を下げると、彼は微笑んで同じようにしてくれ、

「今度来るときはそっちから。」

と言ってくれた。

「はい。」

それだけで気持ちが上向く。

帰りには交番のお巡りさんも声を掛けてくれたので、今日一日が楽しく終われそうだった。

ホテルには裏口がある。

そうだ、学校にも裏口はある。

今日は遠田くんに会うのが面倒だったので、裏口から脱走。
本当はレッスンの日だったが、それも脱走してしまった。

裏口の扉を小さくノック。

しかし、返事がない。

もう一度ノックするが、やはり返事がない。

がっかりしたが、いつも鍵を掛けていないイメージなのと、他の人を見かけたことがないので、恐る恐るノブを回すと抵抗なく開く。

部屋の様子はいつもと変わらないが、人の気配はなく、それに代り妙な声が聞こえる。

女性？と男性の声、何かぺちぺちと、肌を叩くような。

しかし、すぐ何の音か理解でき、顔が赤くなったり青くなったりしたが、音源は少し遠く、どこから聞こえてくるのかがよく分からない。

部屋から漏れる声？

あるいは南野さんともしや彼女が声を潜めて、と想像したら心臓が高鳴った。

身を縮め、一番怪しそうなソファに目を転じると、靴の裏が2つ見える。

それは、右足と左足、逆、左足と右足、一人の人間？

ソファは鎮座、揺れているようには見えない。ただ、その辺りから声が聞こえるのに気がついて、恐る恐る近づくと、テーブルの上にPCが、画面の中で行われているのは、予想通りの行為。

見ると南野さんはソファに仰向けで、少し口を開け、くーか、くーかと寝息を立てている。

これを前にお昼寝なんて、何のためにPCを起動したのか？

疑問符が頭の中を駆け巡ったが、それ以上に画面が気になり、ソファの背もたれにしがみ付き、恐る恐る見た。

あんなことやこんなこと、繰り広げられる痴態。

ええ、そんなことまで、とさらに身を乗り出す。

彼が少し動いたので、びくっとなって彼を見ると、彼は薄目を開け私に気がついて、びくっとなった。

涎は垂れていないが、私は両手で、南野さんは腕で口を抑える。

「すすすす、すみません、勝手に入って。」

「来ていたんだ。」

身を起こし、手を首に当て

「今日は来ないと思って」

と画面に目を向け眉間を寄せる。

「き、昨日の今日ですものね。すみません、連日お邪魔して。」

「いや。」

と、さりげなく画面を閉じる。

「あの、お構いなく。」

「うまくコピーできたか確かめていたんだけど」

意味ねえ、と呟いて立ち上がった。

「犯罪、じゃないですか？」

「友情です。」

大きく伸び、そして奥へ。

「お構いなく。」

「うん。」

でもペットボトルを出してくれたので、私も紙袋を取り出すと、

「いつもすまないね。」

おとっつあん、と言いそうな雰囲気。

「今日は鯛焼きにしてみました。」

「うわっ、気が利く、ありがとう。」

「お好きですか？」

「美味しいよな。」

と嬉しそうなので、私も嬉しくなった。

南野さんは頭からかぶりつき、お茶で流し込むように、私は尻尾からちびちびと、お茶もちびちびと。

南野さんはすぐ食べ終わってしまったので、

「半分食べますか？」

差し出すと、いやいやと手で断わりを入れたので、私の食べかけは嫌だよと引込める。案の定、彼は満腹ではないよ
うで、煎餅にもかぶりつく。

「今日はバイトじゃないの？」

「あ、はい。」

ピアノをさぼったのは内緒。

「南野さんは毎日なんですか？」

「うん、学校から帰って10時まで。」

「長いですね。」

「あんまりすることないし。今日なんか客居ないから、来てくれてよかったよ。」

そう言ってくれたので、また嬉しくなった。

もしかして今日は電話の邪魔も入らない？

「いつもは、勉強していますよね。」

今日は違うけど。

「空き時間なら良いからと、いいバイトだと思わない？」

埴は進学校なので大変そうだ。

「部活はしてないんですか？」

「うん。その代り、土日の夜にスカッシュを。」

「スカッシュ？」

「商店街の途中にある、知らない？」

「スカッシュ？」

「通りの、こっちから駅に向かうと左。」

うーん？

「スカッシュが分からない？」

「いえ、壁打ちテニスみたいな」

「それぞれ。」

「通りに？」

「まあ、あるんだよ。」

帰りに見てみよう。

「商店街の道楽息子、木下J rが経営している」

「道楽？」

「木下さんは、土地を溢れるほど持っているの、働かなくても食べていけるんだけど、貧乏性らしく、商店街で何店か
飲食店を経営している。ところが、次男坊はあまり仕事熱心じゃなくて、でも、何もしないとまずいだろ、で趣味を生
かしクラブ経営。」

「いいですね、お金持ちは。」

我が家は普通のサラリーマンなので羨ましい。

「ただ、スカッシュでは結構有名な人みたいだし、道楽だから設備が綺麗な割には安くて。」

お得。

「いつ頃からやっているんですか？」

「小学生、3年から。」

「すごい、じゃあお上手ですね。」

「いや」

謙遜する。

そう聞くと、よりぴしっとした体に見えてくるから不思議。

「立花さんは？」

「私はピアノを習っています。」

「ああ、イメージ。長いの？」

「小学校に入学した年。」

「じゃあ、10年くらい？」

頭の中で指を折り、再確認。

「はい。」

「そっちの方がお上手そう。」

笑うと

「指、綺麗だもんな。」

と眺めるので、ちょっと恥ずかしい。

「あ、でも、この前先生に、君の指は滑らかに動かないと言われて、ちょっとショックなんです。」

「そっか。まあ、うまくいかない日もあるよな。」

「テンション下がります。」

「その時は。でも、うまくいく日もあるから止められない。」

凜とした表情。

ああ、そうか、すぐへこたれちゃだめなんだと反省。

「私、その先の音楽教室に通っていて」

「ウィザード総合？」

「はい。」

「もしかして辞めちゃった先生って美月先生？」

「ご存じなんですか？」

「うん。結婚して」

「お引越しを。」

「大阪に行っちゃったんだ。」

「はい、ショックです。」

「みづつき、いい人だよな。」

「はい。もしかして南野さんもピアノを？」

「いやいや、イメージ？」

うーん？

「俺、近所なんだ。みづつきも地元で。しかも長いだろう、勤めて、12、3年？」

「はい、習い始めから美月先生だったので。」

「そっか。それじゃあ残念だよな。」

本当に残念そうなので、思い出したらちょっと悲しくなった。

「でも良かった。」

あれ、どうして？

「みづつき、まったく男っ気がなくて、商店街中の人に心配されていた。」

美人だし、喜怒哀楽がはっきりして気持ちがいい先生。

「でも、モテモテだったでしょう？私は大好きです。」

「まあ美人だから。でも、なんていうか、色気がないのかなあ。」

色気って、なんですか？

しかし、南野さんは、はたと思い当たったよう

「俺が言ったんじゃない、皆が。」

「逃げましたね。」

責めると、彼はいやいやと表情で

「俺も、みづつき好きだよ。」

なんだか、美月先生が羨ましい。

「もしかして、初恋の人とかですか？」

それには、いや、みたいな表情だったので、男心は複雑。

「結婚相手はすごく良い人で、金持ちらしい。」

「玉の輿なんですか。」

「らしい。」

「そうですか。いろいろな意味で良かったですね。」

美月先生の幸せそうな笑顔を思い出したら、心から嬉しくなった。

「立花も玉の輿いけるんじゃない？」

「そう、ですか？」

それって幸せなのかしら？

南野さんは小さく2、3頷きながら

「綺麗だし、なにより性格が良い。」

当然のように言ってくれた。

それは、とても嬉しい。

友達や知人、親戚には、昔から「残念なやつ」とか「性格がまともだったら」と言われ続けている。でも、どこをどう直せば良いか正直分からないので、「性格」という言葉は私を俯かせるキーワードなのだ。

だから、そんな風に言ってくれる南野さんこそ性格が良い、と思った。

南野さんに会うと、じわりと元気が湧いてくる。

ピアノへの意欲も戻り、先生が教えてくれる通り一生懸命に、自宅でも復習していると、やがて先生も褒めてくれるようになった。

習い始めの頃に戻ったような気持ち。

教室がある駅の商店街が南野さんのアルバイト先なので、いつも帰りに訪ねると、嫌がらず相手をしてくれ、お菓子のお礼に販促品をもらったり、勉強を教えてくれる。たまに、お掃除係の別室に待機しているパートさんも現れて、ホテルの面白い出来事や怖い話なども聞けて楽しい。

遠田くんは相変わらず煮えないけれど、とにかく駅まで一緒に歩けば納得してくれるみたいなので、彼の話に頷き、心がたまに別のところに飛んだりしながらも付き合った。ただ、教室に通う日、つまり南野さんに会う日は、特にわずらわしく感じてしまうので、会わないよう裏口から脱出した。

そういえば、大声コンテストの開催日ははっきりしないままで、いつまでこの状態が続くのか。

「大声コンテストっていつやるか知っています？」

家庭科の宿題でスカートのベルト付け。

遠田くんに聞くのも面倒なので、南野さんに聞いてみる。

「あれ？まだ」

不思議そうに顔を上げ、プリントに書きこむ手を止める。

「そうなんです、まだ来るんですよ遠田くん。でも、練習もしないし、なにしたいのかさっぱり。」

見るたびに思う、左利きなんだな。

「さっぱりって」

怪訝な表情から頬杖をついて

「一緒に帰りたいんだらう？」

「練習もしないのに、どうしてですか？」

「どうしてって」

プリントに戻る。

「嫌なら断ればいいのに。」

「それも、面倒なのです。」

「面倒？」

「理由を聞きたがると思います。」

「それは」

プリントを捲る。

「聞くだらうな。」

早いなーと感心しながら手元を見る。

「どうしてですか？」

「どうしてって」

「私の時間は私のものなのに、理由を説明する必要があるのでしょうか？」

南野さんは手を止めた。

「それに、皆さん私の言う事なんか聞く気がなく」

「そうか？」

再び書き込みを始める。

「4月にも大学生が毎日校門まで迎えに来て、送って行くよって」

球結びで止める。

「断っても車で乗り付けて。そのうち車は諦めたようで、歩きで」

新しい糸を針に通す。

「毎日駅まで付いてくるんです。断ってもついてくるので、もしかして耳が聞こえないのかと思い本人に聞きましたが、聞こえていました。」

南野さんがちょっと笑った。

「どうやって退治したの？」

退治？

「6月は梅雨で雨が多いですよ。」

「6月まで？」

「はい。」

「根性ある。」

「土砂降りですらついたのでと思いますが、怒鳴られて。近くを歩いていた人が交番に連絡をしてくれました。」

「なるほどね。」

ざっとプリントに目を通すと

「できたよ、回答集。」

折りたたんで鞆の上に乗せてくれた。

「ありがとうございます。」

「どういたしまして。」

南野さんは伸びをすると、私の手元を眺めながら

「それで、あっさり諦めてくれたんだ。」

「新しく送る相手を見つけたんだと思います。」

不思議そうな顔。

「彼女？」

「その人、送り魔なんです。」

怪訝な表情。

「初めて会った時も、他の女性を送っていましたが、人を送るのが大好きなのだと思います。」

沈黙。

「会った事ありません、送り魔？」

「いや」

腕を組む。

「そうですか、私は結構出会うんです」

「送り魔？」

「はい。」

天井を眺める。

「8月にも友達と花火大会に行ったら、声をかけてきた2つのグループの人達が、送る、送らないで揉めて喧嘩をはじめたので、お巡りさんが来ちゃいました。」

「なるほどね。」

全てのボタンを付け終わり、ほっと一息。

「じゃあ、遠田も送り魔なのか。」

「遠田くんは大声コンテストのためですよ。」

「そうだった。」

針と糸をケースにしまうと、プリントに手を合せ、一緒に鞆の中に。

「遠田は、話易いだろう？」

「そうですか？」

「と思う。一緒に帰るのが苦痛な理由がよく分からない。」

「そうですか。」

「ネタが尽きるタイプじゃないから。」

「でも、ほとんど自分の話じゃないですか？」

「それは」

思い当たるように目を逸らす。

「でも、会話に困るよりはなんぼもいいと思うけど、俺は。」

「私は南野さんの方が話易いです。」

南野さんは口に手を当てる。

「ありがとう。」

「だから、私は本当は毎日でもここに来たいのに、南野さんだって忙しいし都合があると思えば我慢できます。どうして遠田くんはそれができないのでしょうか？」

南野さんはとても戸惑ったけれど、すぐ苦笑い。

「確かに、立花の言うことは合っている。」

同意してもらって嬉しかった。

「あら、万結ちゃんいらっしやい。」

「あっ、こんにちは、お邪魔しています。」

お掃除の河北さんが入ってきたので挨拶。

「コーヒー入れましょうか。」

と立ち上がると

「お邪魔じゃないかしらあ。」

何をおっしゃいますか。

「仕事にお邪魔しているのは、私です。ごめんなさい。」

メーカーに粉をセットする。

「私達は歓迎よ、ねえ。」

と南野さんに横目使いし、肩をぺちりと叩くと隣へ座る。この二人は仲良し、河北さんは42歳だけれどそうは見えず、細くてしゅっとした美人。コーヒーが入ったのでカップに注ぎお盆ごとテーブルに置く。

「今日はクッキーを焼いてみました。」

ジップロックから取り出すと、

「渦巻いてる、すごい。」

「万結ちゃん、上手。」

二人が喜んでくれたので良かった。

仲良しの二人に混ぜてもらおうと、話が盛り上がり、つい長居してしてしまう。南野さんが時間を気にしてくれなかったらまだまだ話していたと思うし、本当は話したい。

「駅まで送ってあげたら？店番は私がしておくから。」

河北さんが心配そうに南野さんに言う。

「いいえ、そんな。」

両手を振って遠慮するが、

「酔っぱらいがおるかもしれんな。」

南野さんは呟くと、河北さんから投げられたジャケットを羽織り、目で私を即すので、申し訳ないと思ったけれど、大人しく言うことを聞く。

それになんとか嬉しい。

南野さんはフロントにつながる扉へ向かう。

「表からですか？」

「ポストに寄りたい、目の前なんだ、いいかな？」

「はい。」

「どうせ、商店街では面が割れているし。」

扉を開けると、丁度自動ドアから入ってくるカップルとすれ違う。

南野さんなら「いらっしやいませ」と言うかとも思ったが、それはなく堂々と、しかし道を譲る。私は彼の後ろに少し身を隠し、カップルも目を伏せた。

並んで歩くのは初めてかも、南野さんの背の高さを意識すると、私の目が丁度肩くらい、お父さんと同じ位だから175、6cm。ドアから吹き込む風は少し冷たく体がぶるっと震え、暗い入口から表門をくぐり商店街の明かりを見ると、眩しくて目を瞬いた。

道に出る時、南野さんが足元を気遣うように見てから上げたので、それにつられ目が触れる。

しかし、その目はすぐ後ろに

「どういうことだよ。」

聞き覚えのある声に振り向くと、門の影からその顔。

「遠田」

怒りに満ちた表情、背後からオーラのようなものを感じるほどで、ここまで彼の存在が強く私に届いたのは初めてかも、と感心した。

「二人で騙っていたのか、一体いつからこんなこと。」

『騙して』に思い当たることはなく、『いつからこんなこと』、ここに通うようになった時期と理由を聞かれているのかと思い、えーっと、と頭の中で指を折っていると

「誤解だ。」

南野さんが答えて、簡潔だと感心した。

「誤解だ？」

「ここから出て来たからって、全員が楽しいことをしていると思うのは間違いだ、現に俺は違う。」

「何言ってるんだ、お前。」

遠田くんは南野さんの苦々しい表情と言葉に戸惑ったが、私にはショック。

「南野さんは、楽しくなかったんですか？」

南野さんは言葉に詰まり、若干だが腰が引けた。

私だけ楽しんでたのかと思うと、じんわり涙が湧く。

「南野、てめえ」

「いや待て、遠田。立花が思う『楽しい』の意味を良く考えてみろ。」

「他にどんな意味があるんですか？」

私の問いに、南野さんはふたたび腰が引け

「頼むから、今は混ざらないで。」

と呟く。

「お店の前で騒がれると迷惑なんですけれど。」

声に戻ると、そこには河北さん。

南野さんが天使を見るような表情なので、ちょっと胸がざわつく。

「営業妨害ですよ。楽しい夜は終わったんだから、さっさと帰ってください。」

その表情が悪魔を見るように変わった。

「お兄さんも」

と遠田くんに

「仕方ないでしょう、この二人はそうなっちゃったんだから。」

「いや、ちょっと待って」

「仕方なくなんかねー。俺は友達に裏切られたんだぞ！」

「男の嫉妬は見苦しい。」

「遠田くんて南野さんの友達なんですか？」

「だから混ざらない」

3角が4角になり、誰が何を言っているか分からなくなり、観客が集まり始め、酔った人が、いいぞ、やれっ！と掛け声。

どこかで見た光景だ。

あの時もここで、そう、酔ったおじさんに絡まれた。

ということは、明日生活指導室に呼ばれ、いよいよ実刑に処されるのだろうか。

両親の顔が浮かぶと罪悪感。

私の何が悪いのか。

私はどうしたら良いのか？

言葉を出しても止めても、自分の望むよう物事は進まない。

もしかすると、私という存在はこの世では拒否されるべきものなのか？

ひやりと冷たい風が抜ける。

「立花」

声に目を戻すと、南野さんが見ていた。

それは、私を案ずるような目。

ああ、心配させてしまったのだと思い、大丈夫ですという意味で小さく笑うと、南野さんは眉を寄せる。

そして、まだ揉めている二人に声を掛ける。

「ちょっと話を戻そう。」

南野さんの声に二人が黙る。

「最初に言った通り、この件は誤解だ。」

「だからどんな誤解だよ。」

「立花と俺はそういう関係じゃない。」

「ラブホテルから出てきて、どのツラ下げて言う」

「いや、考えてくれ。立花には『補正』が必要なんだ。」

「補正？」

南野さんは2、3度頷き、目を落とすと、また遠田くんに戻す。

「立花と話すと、自分を受け入れてくれる、そんな気になるだろう？」

「いや、気のせいじゃなくて」

「それは誤解だと思う。」

「誤解？」

「彼女の親切を拡大解釈しすぎだとは思わないか？」

南野さんの問いに、遠田くんは腕を組み考え始めた。

「いや、してもしようがないんだが、しかし、ダメなんだ。」

「ダメって？」

南野さんも腕を組み、念を押すように

「立花補正が必要。」

遠田くんは長い間考えてから、

「ダメ、なのか？」

「ダメ、なんだ。」

「えっ、じゃあ俺は？」

「多分。」

「えっ、マジ？」

「多分。」

「えー、マジ！」

「いや、でも遠田も思い込み強すぎ。」

「俺？」

「思い出せ、いつ了解をもらったんだ？」

遠田くんは頭を掻きながら、記憶を辿っているようだった。

「えっと、最初会った時、彼氏はいるかと聞いたら「いません」って言うので、じゃあ俺はどう？って聞いたら、素敵ですよって。それなら連絡先交換しようって言っても拒まれなかったし、メールを送ったら毎回ちゃんと返ってくるし、会いに行っても一緒に居てくれるし。」

一呼吸おいて

「我ながらちょっとしつこいかなと思ったけど、行かなきゃ疎遠になりそうで、放置しておくとすぐ男が寄ってくる、だから心配で。」

南野さんが2、3度頷く。

遠田くんは理由を指折り数えていたが

「えっ、俺どこで間違えたの？」

「素敵ですよ、からじゃないか？」

「そこから？」

南野さんが私に聞いた。

「なんで連絡先交換したの？」

なんで？

「皆さん交換していたので、自分だけしないのもルール違反かと。」

南野さんは再び頷く。

「えっ、じゃあ、歩道橋のは？」

「大声コンテストの練習だと思っている。」

「えっ、な、何？」

遠田くんは南野さんにすぎる勢い。

「立花が隣に居るので、立花の名を借りて『大声コンテスト』の練習をした。」

「大声コンテストって、なんだ？」

「遠田は市外だもんな。毎年やるんだよ、市で。」

遠田くんは知らない、あれ？

「デシベル量るやつ？」

「量るやつ。」

「いい感じって、笑ってくれたぞ。」

「いい感じだったんだらう？その件に関して遠田は、多分悪くない。」

「立花補正？」

南野さんは頷く。

遠田くんがよろりと、門柱に背中を付けた。その様子を眺めながら、

「だから俺の件も補正してくれ、誤解だ。」

遠田くんはただ南野さんを見上げしばらく見つめ合い、南野さんが頷く。

やがて私に

少し眉を寄せた。

それは、良いとも悪いとも言えず、どんな意味なのか。

私の心臓が、一つ大きく打つ。

しかし、南野さんはすぐ眼を伏せると、

「河北さん、すみませんが、彼女を駅まで送ってもらえますか？俺が店番しています。」

「了解。」

南野さんはジャケットを脱ぎ、河北さんに手渡し、横に目を向けると頭を軽く下げ

「お騒がせしてすみません。」

お巡りさんが苦笑い、

「大変だね。」

「いえ。」

そして遠田くんに手を貸すと、戸惑う彼を中に連れて行った。

「大丈夫ですか？」

お巡りさんの声に目を向けると笑顔だった。

「はい、ありがとうございます。」

「また、通報がありました」

「また？」

河北さんがお巡りさんに聞くと

「この前は酔っぱらいに」

私は、二人の会話を眺めながら思い出す。

『彼女の親切を拡大解釈しすぎだとは思わないか？』

私の親切、それはなんだろう。

『誤解だ。』

迷いない否定。

眉を寄せた表情。

同情あるいは軽蔑。

私は、

「万結ちゃん。」

話が終わったのか声を掛けられ、河北さんに意識を戻す。

「駅行こうか。」

「はい、ありがとうございます。」

商店街の真ん中を堂々と歩く河北さんにただついていく。

ジャケットは河北さんの体には少し大きくて、肩が落ちていて、なんだか可愛い。

でも、そんな感想しか浮かばないのかなあ、と自問した。

翌日、校長室に呼ばれた。

いよいよ実刑なのだと思うと、両親に申し訳ない。

退学は重すぎるよね、きっと停学くらいで済むのではと、自分を励ましながら廊下を歩くが、でもこんなことが続いたら、いずれ退学になってしまうと思い至り、やはり暗い気持ちで扉をノックすることになった。

返事があったので扉を開け、一礼し頭を上げると、校長席の前の応接セットに、豊かな腹部と寂しい頭部の校長、手前の長椅子には担任の柿木先生が座っている。

「掛けたまえ。」

「失礼します。」

柿木先生に招かれたのでその横に腰かけ、状況に恐れていますという表情で先生を見ると、まあまあと表情で返してくれる。

「今朝警察から電話があって、昨夜また商店街で騒ぎを起こしたそうだね。」

「はい、申し訳ありませんでした。」

頭を垂れる。

「高校に入学してから何回目かな？」

うーんと、7、8回目？10回はない。

「君の名前を聞くたびに、私の心臓は縮み上がる。心臓発作で死んだら君のせいだ。」

さらに頭を垂れる。

「校長。」

柿木先生が止めてくれた。

「君の華麗なる経歴は拝見したよ。」

校長が紙を取り出した。

「高校に入学してから、生活圏内でさまざまな問題に巻き込まれているようだね。4月は3ヶ月間大学生からストーキングされ、7月はプールで露出狂に絡まれ、8月は花火大会でナンパしてきたグループがもめ、9月は外出先から痴呆症の老人が自宅まで付いて来て、そして、10月はすごいね、親戚の結婚式場で他室の新郎に一目惚れされ殺傷された、ホテ

ルの前で酔っぱらいに絡まれ、昨日は三角関係。」

いえ、三角関係ではないのですが。

柿木先生がさらに、

「6月には教育実習生が彼女に入れ込みましたよね。最近は埴高校の学生が毎日お迎えに来て、先日その歩道橋で愛の告白を」

愛の告白？

「私の心臓が縮む理由が分かって貰えましょう。」

校長先生がしんみりするが、柿木先生は

「まあ、しかし、一概に立花が悪いとは思えませんので。」

「これは君個人の問題」

校長先生は紙を折りたたみ、考えを深めながら

「そう切り捨てたいところだが、それではどうも問題が片付かないようだ。」

わずかに見える希望の光。

「元々、君がわが校を選んだ理由は、女子高なので校内では問題を起こさないだろう、という親御さんの配慮だそうだね。」

「起こりましたけどね。」

柿木先生が呟く。

「今日お電話を差し上げたら、お母様がそのように。中学時代から苦勞していたので、一番近い女子高という理由で選ばれたそうだ。申し訳なさそうにおっしゃっていたよ、さすがに、入試の面接では言えないね。」

そんな理由だったかしら？

ただ単に近くて良いじゃないとお母さんが言ってたし、全寮制も薦められたが、それは嫌だった。

「君は特待生だし、校内での評判は良好です。」

「ありがとうございます。」

「親御さんは君を信じておられるし、担任の柿木先生も。」

柿木先生を見ると頷いてくれた。

ありがとうございます。

「警察からも、君が悪いわけではないということを念押しされ、問題を起こした男子高生も、君には無関係だと言い張ったらしい。」

南野さんと遠田くん。

「無関係ではないんだけどね。」

柿木先生は呟くが、すぐ笑顔。

「まあ、君を知る人は、おおむね君は悪くないと分かっているから。」

おおむねを強調された。

「ということなので、まあ今回も注意で済ませる。」

校長先生は腕を組み大きく頷いた。

「あ、ありがとうございます。」

「とはいえ、君はいささか自覚が足りないようなので、今後は一層自重するように。」

自重。

「君子危うきに近寄らず、繁華街に行くときは親御さん同伴かなるべく大人数で、目立たないよう注意して、問題の起こりそうな場所には近づかない。」

「は、い。」

「不服そうだが」

校長がぎろりと睨む。

「いえ、あの、注意します。ありがとうございます。」

柿木先生に目を向けると、なぜか先生は目を逸らした。

「ぜひ、大学への進学実績で学校に恩返しをしてもらえるようお願いするよ。」

「は、はい。」

なんというプレッシャーを最後にかけるのか。

指導室を後にする。

出しなに

「今後問題があった場合は校長室に呼び出すからね。」

「はい。」

失礼します、頭を下げ扉を閉めると、中から小さな声。

「まったくもって目の保養だな。」

「首になりたいんですか。」

帰宅準備をし校門に向かうと、そこに遠田くんはいなかった。

当然だと思し、彼には悪いけど胸をなでおろす。

ただ、それは同時に、南野さんと会えなくなることも示すのではと思った。

私にとっては楽しい場所、でも世間から見れば問題の起こりそうな場所。

行ってはいけない所。

私は南野さんに謝る機会すら失われたのだろうか。

いや、

きっと来てほしくないのだ。

時が経つほどあの表情の意味は重くなり、どんどん胸を圧する。

南野さんの思い出の多くは笑顔だけれど、それは私の迷いを払ってくれはしない。

最後に彼が見せた、真実なのかもしれない。

「ありがとうございました。」

音楽教室の受付で会員証をしまうと

「お疲れ様でした。」

係りの人が笑顔で送り出してくれた。

エレベーターの1Fボタンを押し扉が閉まると、帰りに交番に寄って先日のお詫びとお礼を言う心の準備。

交番は南野さんのアルバイト先とは逆方向。

ふと、私はこの商店街に来ることも止めた方が良いのか、と思い至った。

酔ったおじさんの件は、たまたまホテルの前だったが、この商店街で起こったこと、繁華街に一人で行くのは禁じられたような。

エレベータを降りて通りに向かうと、人の往来が目に映る。

南野さんに偶然会う可能性もあり、それはきっと嫌だろう。

ここは南野さんの地元で、彼がそのことで気を使うなんて間違っている。

もう美月先生もいないので、それほど未練はないかな。

そう考えて、通りに出る前に踵を返しエレベーターに戻った。

「立花。」

聞き覚えのある声に振り向くと、表扉からその顔。

見慣れた2つだけど、組み合わせは初めてだったので感動。

「コスプレ」

「正装です。」

制服姿は凛々しくて5割増し、会えて嬉しかったのでぴょんぴょんと飛んで行きたいが、自粛。

「忘れ物？」

「いえ」

「何か用事があるなら」

「いえ、大丈夫です。」

「なら、ちょっといい？時間、大丈夫？」

「はい。」

彼の傍に。

南野さんは首を掻く。

「待ち伏せなんて、すごい勇気があるな。」

「遠田くんは毎日でしたよ。」

「だから言っただろうが。」

苦々しく吐き出すのだが、そんなこと言ってましたっけ？

「学校に行こうかと思ったんだけど、いろいろまずいと思って。」

「あ、はい。」

「次の日呼び出しくらった？」

「はい、校長先生に。」

だよなという顔。

「大丈夫、だった？」

「はい。注意で済みました。」

校長先生の言葉を思い出し

「私には関係ない、と言っていたように」

柿木先生は否定した。

「実際そうだろう。」

私は、柿木先生が正しいと思っている。

「結局、俺らも校長室に呼び出されて」

「えっ？いらしてたんですか？」

「いや、うちの高校の」

ああ、そうですね。

しかし、どのみち迷惑な話。

「本当に申し訳ありませんでした。」

頭を下げようとする、手で留める。

「いや、理由が違うので。」

「違う？」

「遠田と校長室に行くと」

「遠田さんと」

「ところで、何で遠田は“くん”なのに俺は“さん”なの？」

考えたけれど答えが見つからなかったので、首をかしげる。

「まあ、いや。河洲商店街のラブホテルに男同士で入ったやつがいて、そのうちの一人が塙の制服だったと匿名電話があったらしく」

男同士。

「入りました、ね。」

「入りましたとも。」

「手に手を取り合っていました、ね。」

「取り合っていましたとも。」

状況を想像すると、なんて分が悪い。

「あっ、じゃあ、私が事情を説明に」

「いや、混ざらないで。」

すぐ断われ落ち込みそうになったが、彼の表情は明るい。

「そういえば、分かったんだ、今年の大会日。」

大会？

「大声コンテスト？」

「11月3日。」

11月3日は祝日、何の祝日だったかな？

「それは絶対教えたくて。」

「結局、遠田くんは、出るんですか？」

「出ないだろ、あ、いや、出るかな？」

「出るんですか。」

「いや、やっぱり分からない。」

なんだかすごく迷っている。

「あっ、でも、歩道橋の件って、愛の告白だったんですね。」

「気づいたんだ。」

驚き

「先生が言っていました。」

がっかりした。

「遠田くんは、もう来ないですよ？」

南野さんは少し表情を硬くした。

「来てほしい？」

「いいえ。」

言下に否定すると笑われた。

それはいつもの笑顔。

「前にも言ったけど、遠田はモテるんだよ。」

「そうですか。」

「その遠田をぶった切るなんて、すごいな、立花。」

「そんな、物騒なことしていません。でも、謝らなければいけないなど、思ったので。」

「立花が？」

「はい。それに、なにより、南野さんには本当にご迷惑をおかけして、なんてお詫びをすればよいのか」

「どちらにも必要ないと思うけど。」

「そうですか？」

「です。」

「あっ、お詫びではなくてお礼でしょうか？」

また言葉を間違えたのかも。

「礼？いや。」

「そんなわけには」

「そちらもお気遣いなく。」

こちらもあっさり拒まれて、なんだか切ない。

南野さんは、笑顔だけれど、楽しいけれど、

やはり、もう二度と関わって欲しくない、そう言われているような気がしてきた。

「ただ」

南野さんが言葉をつないでくれた。

「一つ、気になっていることがあって」

「はい。」

「立花史」

「立ち話？」

「いやいや、立花の歴史。いままでの人生でいったいどれほど問題に巻き込まれてきたのか。」

私の歴史？

それはささやかなもの。

「それほどのものでは」

「思い出したんだ、みずっきが言ったこと。」

「美月先生が？」

「教室に綺麗な女の子が居て、しょっちゅう男の子にいじられて泣いている。立花のことじゃないか？」

習い始めはグループレッスンだったので、そんなこともあった。

「私か分かりませんが、そんなこともありました。でも、美月先生が守ってくれたので、大丈夫でしたよ。」

南野さんの表情はそれで納得していたが

「みずっきの男っ気のなさの原因は、案外、立花じゃないかと。」

私が、何を？

「好きなら優しくすればいいのに、いじめるなんてダメよね。男ってホント馬鹿みたいと男に向かって言っていたから、それを男に向かって言うアンタがダメだろと思っていた。」

でも気がついたように、

「もちろん黙っていたけど。」

「逃げましたね。」

責めると、彼はいやいやと表情で

「俺は、みずっき好きだよ。」

やっぱり、美月先生が羨ましい。

「本当は、初恋の人ですよ？」

それには、いいや違う、という表情だったので、男心は複雑。

「で、5、6歳の頃からそれじゃあ、さぞや多種多様な問題に対応してきたのだらうと興味が湧いたので」

「いいえ、そんな」

「お礼はいいから、いや、お礼に、聞かせて欲しいなと」

「えっ？」

「毎日来ても、全然迷惑じゃないから。」

また通っても良いということ？

「はい、喜んで！」

嬉しさのあまり南野さんの胸ぐらを掴んでしまい、彼の腰が引けた。

慌てて手を離すと、猛省。

「あっ、でも私、繁華街への出入りを禁止されていて」

「出禁？どうして。」

「問題が起こりそうな場所には、親か大人数で行くようにと校長に釘を刺されました。」

「問題が起こりそうな場所？」

南野さんが考えるので、

「あの、ここの商店街がどうこうではなく」

地元の問題がありそうに言われては気分が良くない。またまた失礼なことを言ってしまったと反省。

「立花が居るのに問題が起こらない場所ってどこなんだ？」

どういう意味でしょう。

「むしろこの商店街の方が良いと思う、みんな慣れてるし。」

どういう意味でしょう。

それに

「そんなに多くないですよ。」

話はすぐ尽きてしまう。

「謙遜？」

「いえ、本当に。」

そうしたら、また理由がなくなってしまうのか。

「心配には及ばない。」

心配が消える理由。

「立花の周りでは毎日必ずなにかが起こる。」

どういう意味でしょうか？

「一緒に居ると楽しいよな」

明るい笑顔を浮かべ

「飽きないというか。」

それは、褒められたのかな？

でも、結果は良いかも。